



OVERSEAS

People's Republic of Bangladesh

— バングラデシュ人民共和国 —



海外事情

アジア最後の新興国 バングラデシュ



福澄 浩恒 FUKUZUMI Hirotsune

株式会社社長／海外事業本部／海外技術部

政変を迎えたバングラデシュ

バングラデシュ人民共和国。聞いたことはあるが、どこにあるのか分からない国の一つかもしれない。

最近では、2018年に一旦廃止したクオータ制度（独立戦争での英雄子孫に向けた公務員採用優遇枠）を復活させたことに不満を抱いた学生の運動が7月に過激化し、8月のハシナ首相（当時与党であるアワミ連盟総裁）の逃亡・辞任

により政権の崩壊まで至ったニュースは記憶に新しい。現在は、ノーベル平和賞受賞者の一人であるユヌス首席顧問による暫定政権により行政が行われているところである。

インドの西かつインドに囲まれた（一部ミャンマーに隣接する）小さな国（北海道の約1.7倍）である一方、青年層を主体とした人口は約1億7千万人（世界ランキング8

位）と日本を上回っている。地形はほぼ低平地で、三大河川であるガンジス川、ジャムナ川、メグナ川が合流するデルタ地帯を形成しているため、洪水被害の多い国でも知られる。

公用語はベンガル語で、大卒の多くは英語も話す。主産業は、お米とジュートなどの農業や縫製業で、近年IT分野も拡大しつつある。ダッカ首都圏の人口はこの20年

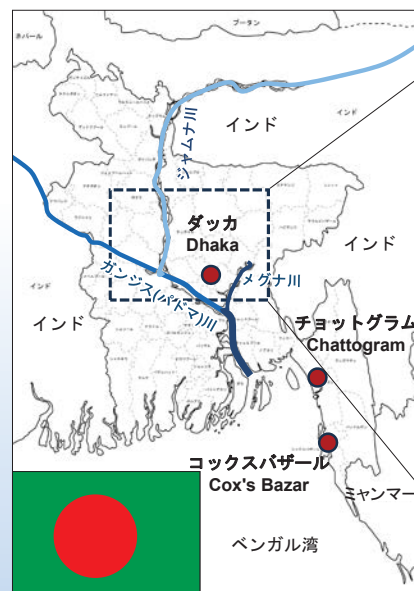


図1 バングラデシュ人民共和国と隣接国

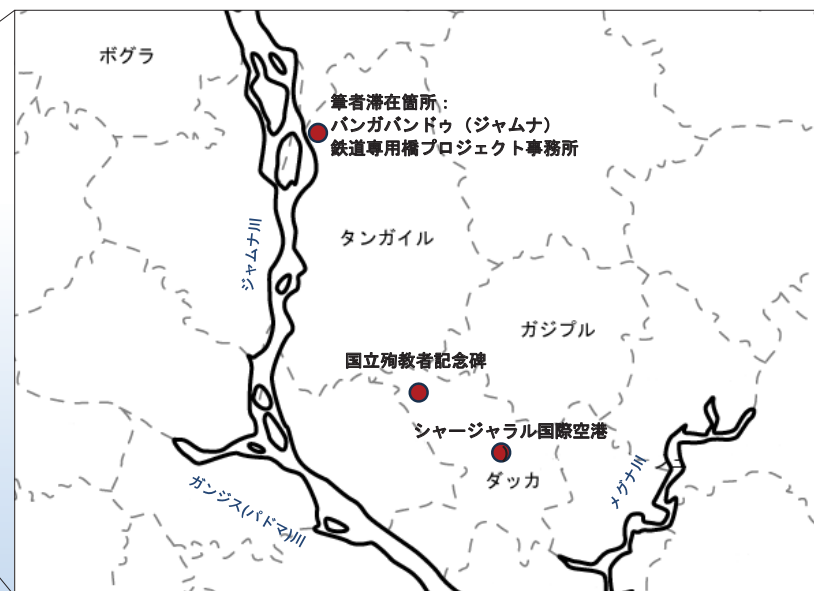


図2 首都周辺拡大図

で倍増し、2023年には大気汚染の原因であるPM2.5の濃度が世界最悪となった。

気候は、雨季と乾季があるが雨が一日中降り続くことは比較的少なく、あつという間に乾いてしまう。気温は、日中30℃を超える日が多いが、12月から1月の2ヵ月は朝晩10℃くらいまで冷え込む。ベンガル人は20℃を下回るとニット帽にダウンを着たりするので暑そうに見える。

在留邦人数は約1千人と少なく、ダッカ市内でもごく限られた地域でしか会わない。日本食レストランも数件で、日本の食材は韓国食材店で手に入っても約3～5倍の値段でとても手が出ない。

日本との関わり

パキスタンから独立後50年が経過、日本は独立直後より国交を樹立し、50年近くにわたって、ODAでインフラの多くを支援していることもあり、友好関係にある。国旗もデザインが似ているのは、日本の日の丸を参考にしたからだそうで、赤丸が左に寄っているのは、風になびいた際に真ん中に見えるようにとのこと。

2023年9月からは、成田ーダッカ間の直行便が就航開始され、シャージャラル国際空港の第3ターミナルも日本のODAにより建設中（運用開始は2025年）であり、ますます便利になりそうである。

空港と合わせて接続するその周辺の道路、鉄道、住居や商業施設等の整備が他国の支援も含めて進み、ダッカ中心地への高速道路や高架道路の整備は特に渋滞解消と移動時間の短縮に大きく貢献している。

バングラデシュの通貨はBDT

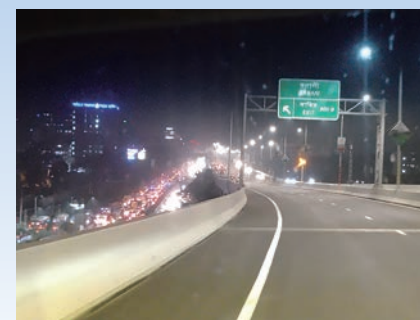


写真1 ダッカ高架高速道路バナニ出口付近



写真2 私の好物マトンビリヤニ

（バングラデシュタカ：1BDT=約1.20円）で、お札は9種類、硬貨は3種類あるが、そのうち2BDT硬貨は、日本の造幣局が製造したものである。

民族と習慣

国民の約90%がイスラム教徒で、国教はイスラム教である。一般的にお酒を飲まず、豚肉を食べないが、外国人向けなのか、国産ビールがあり、豚肉生産地もある。主食は、カレーとお米で、少量のカレーを山盛りのご飯で食べる。お勧めなのは、スパイスが沢山入ったお肉の炊き込みご飯「ビリヤニ」である。一般的には、来客や特別な祝い時に食べるらしい。マトンやビーフがゴロツと入って絶品である（約200BDT）。

朝の挨拶は、「ショボショカル」だが、多くのベンガル人は「アッサラーム・アライクム」に対し「ワ・アライクサラーム」と返す。「あなたに平和が訪れますように」、「そ

してあなたにも平和が訪れますように」。人を思いやる言葉なのだ。

日曜日は平日で、週末は金曜・土曜日。多くの企業が週休2日制である（工場などは1日らしい）。金曜はモスクへお祈りに行く。

バングラデシュにも長期の休日がある。断食明けと犠牲祭の2度のイード（Eid）で、この前後は多くの人が帰省するため、この前後はダッカ市内から地元へ帰る車で大渋滞となる。安価な鉄道での帰省者も多く、違法であるが客車の屋根に多くの人が乗る風景は風物詩となっている。犠牲祭は、牛やヤギなどを神様に捧げる祝祭で、貧しい人へ振る舞われるなど特別な日でもある。

ラマダン（断食）の約1ヵ月間は、日中は水もほとんど取らないが、18時以降翌朝4時くらいまでの間には食事を取ることが可能で、むしろ普段より多めな量の食事を取ってしまい、太ってしまう人も多いとか。



写真3 帰省客を乗せたバングラデシュ鉄道

交通事情

バングラデシュ国内の移動は、主に鉄道、バスそして車となる。近場の移動では、自転車リキシャ、オートリキシャ(CNG)、電動リキシャ等がある。他の国と比べると圧倒的に足漕ぎの自転車リキシャが多い。

車は、日本と同じ左側通行で、ほとんどが日本の中古車である。よく見ると、10年以上前の日本の車検やメーカーのシールが貼られたまま走っている。幼稚園の送迎バスもそのまま、ほっこりしたりする。

渋滞の原因となっているのは、概ねバス乗り場のようで、次から次へとバスが来るのだがお互いに前に前にとせめぎあいが続きなかなか動かないのだ。こうなると、警備員が棒で叩いて誘導する。そのためなのか運転が下手なのか分らないが、多くのバスはボコボコなのである。

2022年12月28日に部分開業した国内初の都市高速鉄道「ダッカメトロ6号線」は、日本の協力により建設されたもので、日本のシステムが採用され、改札から車両まで日本にいるような気持ちになる。

過酷な縫製産業

私が長期滞在しているタンガイル地区は、サリーの生産地としても知られ、特にハンドメイドの刺繍ものは質もよく芸術的で、インドからも買い付けに来るほどだとか。

また、日本のジーンズなども扱う多くの縫製工場もあり、朝晩の出勤時間帯には大勢の女性従業員が門の前に並ぶ。ここ数年では、過酷な労働条件や賃金問題など、労働運動も頻繁に行われている。この様子はダッカ出身のルバイヤツ



写真4 バングラデシュの一般的なバス



写真5 縫製工場の朝の風景

ト・ホセイン監督の映画「メイド・イン・バングラデシュ」でも知ることができる。

8が4で、9が7

食料品を買うときに気になる賞味期限。ここで困るのが数字。多くがベンガル数字で印刷されている。0～9の数字は少なくとも覚えなないといけない。ややこしいのが、2つ。4と7が、日本の算用数字に似ているので間違いがちである。

映画が始まる前には

日本とほぼ同等の設備の映画館は、大きなショッピングモールの中にある。入れ替え制で約350 BDT(約420円)程度。約1,500 BDT(約1,800円)と高いがVIPシアターもあり、ゆったり空間にフルリクライニングシートである。日本の映画も上映されることもあり、「呪術廻戦」や「ONE PIECE」といったアニメが人気である。

映画本編が始まる前には、近日公開の予告編や商品の紹介などが流れるのは日本も同じだが、少し違うところがある。本編開始直前にバングラデシュ国旗がはためく映像と共に国歌が流れ、皆一斉に起立し、映像が終わるまでスクリーンを眺めるのである。インドでも概ね同じだが、バングラデシュでは国歌斉唱まではしない。ちなみ

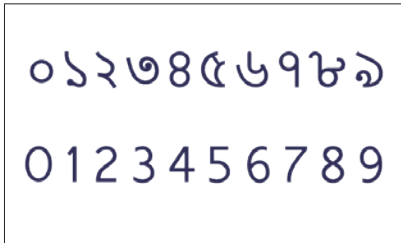


図3 ベンガル数字と日本算用数字の対比

に、国歌の作詞はノーベル文学賞受賞者でインドの詩人タゴールである。

夏のフルーツシーズン

夏の楽しみは、山のように積まれて並ぶフルーツである。

マンゴー、ジャックフルーツ、ライチ、グアバなどが出回る。マンゴーは、日本ではあまり知られていないものの、世界輸出ランキングでも10位以内に入るほど。ラジシャヒ、ボグラなどの産地が特に有名で、50BDT(約60円)/kgと非常に安価で、香りもよく美味しいので、家族へのお土産に買うのだそうである。国果は、甘くて栄養価も高いジャックフルーツ。ダッカ市内でも至る所に巨大な実をつけているのが見られる。安価で手に入るが、一人で食べるには量が多過ぎる。

ライチのシーズンは3週間くらいと短いものの、色も香りもよく甘いのでとても人気がある。



写真6 避暑地コックスバザールにあるコラトリビーチ (Kolatoli Beach)



写真7 国立殉教者記念碑 (National Martyrs' Monument)



写真8 重厚感あふれる国会議事堂



写真9 ラールバグ・フォート

国民の避暑地コックスバザール

ベンガル人の避暑地というところ圧倒的に人気なのが、コックスバザールである。国内最大の貿易港を有する国内2番目の大都市チョットグラムから約50km南に位置する。ダッカから飛行機で1時間半である。雨季が明けた10月頃から3月初旬の間が観光シーズンで、多くの家族連れで賑わう。見どころは、インド洋に面する全長125kmにおよぶ世界最長の天然ビーチ。昼間は日差しが強く暑いが、さざ波の音と砂浜に夕陽が映り込む時間帯は幻想的で、散歩するのがお薦めである。ここでは、獲れたての魚を選んで好みの調理法で食べられ

るのも魅力的である。

歴史的な建築物など

バングラデシュで最も象徴的な建造物は、国立殉教者記念碑だろう。1971年の独立戦争で亡くなった人々を祀っている碑で、紙幣の図柄にもなっている。正面から見るとねじれているように見えるが、7つの壁が重なっている。この7つの壁は節目となる歴史を表現している。

そして、もう1つ、渡航前に知人の建築家にも勧められたのが、国会議事堂である。アメリカの建築家ルイス・カーン氏の設計で、国内で最も洗練された建築物の一つではないだろうか。

独立前の建造物では、ダッカの南にあるオールドダッカに、インドにあるフマユーン廟風の建物ラールバグ・フォートがある。17世紀ムガル朝時代に建てられた城跡であるが、中に入ると外のカオスと違って、ほのぼのと家族連れや学生で賑わう憩いの場となっている。

最後に

隣国インドに比べ観光資源も乏しく、近年まで最貧国の一つとまで言われたバングラデシュであるが、多くの命を奪われながら政変までこぎつけた学生の熱量はかなりのもの。今後のこの国の発展が楽しみである。